

〔書言字考節用集五肢體〕唾ツキ 口津同

〔古事記上〕故爾見其頭者、吳公多在、於是其妻理○須世以牟久木實與赤土授其夫色葦原故、昨破其木實、合赤土唾出者、其大神之男命以為昨破吳公唾出而於心思愛而寢、

〔古事記傳十〕唾出者は、都婆伎伊陀志賜閉婆と訓べし、和名抄に、唾和名豆波岐と見え、字鏡に、唾口水也、液也、唾也、與太利、又豆波志留、また液小兒口所出汁也、豆波支などあるは、みな其物を云ば、體言なるを、今は用言にいへり、さて此都婆伎てふ言に疑あり、そはまづ今世にも、口水にた都と云言も、もと船の泊る所の名なれば、それを津といへば、唾は津吐の意なるべし、然るに津字も、古言にはあらで、津字より出たる言なり、されど唾はたゞ吐とはこのさまひとしか、若然れば、都婆久と訓むほかなし、

〔倭名類聚抄三〕津頤 病源論云、津頤利○多○小兒多涎唾、流出於頤下也、

〔箋注倭名類聚抄二〕醫心方同訓神代紀、漢新撰字鏡、唾、醫心方涎亦同訓、按與即唾垂之狀、與謂涕下、爲與々登奈久之與同、太利垂也、○中原書云、滯頤之病、是小兒多涎唾、流出漬於頤下、按幼々新書引五開貫真珠囊、亦作小兒滯頤、此所引作津恐誤、但醫心方引病源論作津、與此合、類聚名義抄、伊呂波字類抄、並亦作津、今姑依舊多紀氏桂山曰、涎出不絶、津々至頤、故曰津頤、未知其說是否、又按漬字似不應、無此恐脫、

〔類聚名義抄二〕涎俗涎字 ヨタリ アハ

〔伊呂波字類抄人〕津頤 ヨタリ 涎 次已上同

〔下學集上〕涎ヨタリ

〔萬安方四〕滯頤多涎病也 ヨタリ

巢氏病源論云、小兒滯頤候、滯頤之病、是小兒多涎唾流出、漬於頤下、此由脾冷液多故也、脾之液爲涎、脾氣冷不能收制其津液、故冷涎流出、滯漬於頤、